

結 章 学校法人日本体育会経営高等学校の課題と展望

— 結びにかえて —

学校法人日本体育会が維持・経営する高等学校の沿革を、ここで改めて整理して結論を与えることは難しい。そこで、ここでは本会傘下の高等学校がどのような課題を抱えているのかを示し、その課題の解決に取り組んできた高等学校側の姿勢を概観してみることしよう。

学校法人日本体育会の維持・経営する高等学校は「私立」学校であるために、入学志願者の確保にまずもって取り組んでいかねばならなかった。現場の教育を与かる教育職員（教員）といえども、事務職員と協力して広い意味での経営の仕事に従事しなければならなかったのである。高等学校に入学してくる十五歳人口が増加の一途をたどった時代にはその経営努力は「教育の中身」に向けることによって達成されたが、当該人口の激減が予測されはじめたころから入学志願者を誘うための努力が通常の教育活動の外で行われるようになってきた。新時代に対応するためのカリキュラムの改訂作業がはじまり、その改訂の基本方針をめぐって開催された職員会議では白熱した議論がたたかわされた。カリキュラムの改訂作業は公立、私立を問わず新入生を誘うための学校の魅力づくりに照準をあわせてきたが、とりわけ私立高等学校の場合には死活問題として受けとめられたのである。

「魅力ある高等学校」づくりを推進するための方便として「大学進学率の向上」と「スポーツの有名校化」が図られた。全国制覇をスポーツで達成した高等学校には多くの入学志願者が殺到するようになった。有名大学への進学率の向上はそのまま該高等学校の魅力度を高めたのである。だから、新設の高等学校の関係者の多くはスポ

一ツでの有名校化をまずもって達成し、次いで大学進学率の向上を図る手順を踏むようにもなった。

いっぽう、魅力ある高等学校づくりは魅力ある大学との運動が可能な場合には比較的容易に達成される。たとえば、有名私立「総合」大学との「付属」関係を結んでいる高等学校を一瞥すればこのことがたちどころに見えてこよう。学校法人日本体育会が維持・経営する日本体育大学は有名私立大学の一つであることには変わりはない。しかし、「体育」に関する「単科大学」であるために、将来、体育・スポーツの分野で羽ばたくことを目指している高校生しか吸収することができない。同一系列下にある大学が単科大学であるが故の悲哀がここにあるといえそうである。だから、高等学校側からすれば、日本体育大学が「体育学部」以外の学部を増設させ、「総合大学」へと改組されることが望まれているといえる。魅力ある高等学校づくりは大学との連携プレイによって達成されねばならないわけである。

しかし、だからといって同一法人の下にある日本体育大学と高等学校とは「付属」校関係にあるのではなく、「姉妹」校関係にあるという現実には、動かしがたい事実である。したがって、いっぽうでは体育コースを設けて大学との接近を図りながらも、他方では独自の生き残り策を講じていかねばならないといえよう。法人傘下の高等学校各校では新時代のニーズに応えうる教育課程の整備が終り、その教育課程が教育現場における実践の時代に入っている。その成果は着実に達成されつゝ、あり、学校法人日本体育会の傘下にある高等学校の魅力ある学園づくりは完成が間近いといえよう。